

女^の目^で見^た
not all but almost
男^のプ^ライ^ド
— 職場いろいろ・人間いろいろ —

加藤洋子 著

青山ライフ出版

はじめに ハダシが好き……………	6
私が接した「ある職場の女性たち」……………	8
私見 仕事いろいろ・職場いろいろ……………	26
「小さい写真店」……………	64
「バカは、死ななきゃ、なおらない」？……………	82
パートのおばさんの目で見た・太平洋戦争の「上層部の男たち」……………	90
なぜ、「上層部」には、甘い考えの人が多いのだろう……………	98
相手は「両刃の剣」でっせ……………	120
何が、官僚を、そうさせるのか？……………	126
官僚にも、二種類のひとがいる……………	138

すべては「上層部の人」次第……………	140
「スーッと、わかってくるんだよ」……………	144
マニユアルと、人の命……………	148
「スーと引く人」と、「スーと出る人」……………	150
私が思う「80%の官僚」の弱点……………	170
官僚は貧乏人でもあるまいに……………	172
認識しないのが、悪い！……………	176
プライド・プライド・プライド・プライド……………	186
勝ち組と負け組 『縁』という宇宙の力の摩訶不思議……………	194
おわりに 「えっらそうなヤツ」とは、誰なんだ！……………	208

装帧/江尻 智行

— 職場いろいろ・人間いろいろ —
女の目で見た
男のプライド

はじめに

ハダシが好き

私が若い頃、こんな話を聞きました。

アメリカだか、フランスだかの、映画スター（肉体派女優）が言ったそうです。

「私は自転車に乗って口笛をふく人生を送るくらいなら、
ロールスロイスの中で泣いている人生のほうがいい」

これに関して、あなたさまなら、どう思われますか？

ハ？ 「ワタシもそう思うわ」？

「なんであれ、泣いてる人生はイヤだね」？

「人それぞれだから本人がそれで良ければ良いんじゃないの？」？

「ワタシなら、それよりも、ロールスロイスに乗って口笛をふく人生がいい」？

「いいえ、自転車で口笛。それが、一番いいのです」？

人それぞれ・ですが、私の場合は、素直な気持ちでこう思いました。

「ロールスロイスにも自転車にも乗らないで、口笛ふいて、裸足で歩く人生がいい」

それが「最も・自分らしい」気がしたのです。

誰しも、人生は一回限り。私の人生も、一回限り。

ならば、他人を不幸にしたり犠牲にしたりしなければ、好きなように生きればよい。

「では、やってみれば、いいジャンか！」

・・・というところで、裸足で、歩くことにしたのです。

ところで、私は「特別な人」じゃないから、いわゆる「並みの人」。

いや！「並みの人・以下」かもしれない。ハイ。

人さまから褒めていただけのような、立派な経歴も看板もありません。

経歴といえば・・・これからお話しすることが、すべて経歴みたいなものですが。

(ちなみに、私の年齢は、今は、ご想像願います)

そんな私が、裸足で、流れ流れて、歩いているうちに、

最もやりきれない思いをし、最も避けて通れなかったのが、

「プライド」が介在する人間関係だったのです。

いままで「プライド」なんて、ことさらに意識してこなかった私でした・・・が。

私が接した「ある職場の女性たち」

私が働いた職場は「男ばかりで・女は私だけ」とか「私だけ・皆と離れてやる仕事」というのが多かった。私生活でも男ばかりとつきあつて女友達はいなかった。べつに同性を嫌っていたわけでなく、男と話すと面白くて、それで満足してしまったからだ。それで・・女の私が言うのもキモチワルイけれど、「私は、女に慣れていなかった」。つまり「同性とどう接すればいいのか、よくわからなかった」のです。そんな私が、中年になつて、初めて「女の職場」（同性が圧倒的に多い職場）で働き出した時のこと。

●その初日。周りの人から「わからないことがあれば聞いてください」と言われたが、初めての職場に入つてきて、「何がわからないのか、が、わからない」段階だった。

先輩のH子さんから「これを、あそこに運んで下さい」と言われて、あそこに運んだ私。しばらくすると、A子さん（四十代）が来て「あそこに置いたのはあなた？」

「そうです」

「ダメ。あそこはダメ。邪魔になるから、今すぐ、どかして下さい！」

私は「ハイ」と言つてどかすと、彼女はつけ加えて言った。

「あのねえ、あなたはまだ慣れていないのだから自分で勝手に判断しないで下さい！」

初日に誤解されてしまったら、そのまま偏見を持たれるかもしれない。と思った私は、

「あのー それは、日子さんから指示されたんですけど」

「あ、そうだったの？」とか言われると思ったたら、A子さんは突然大声を張り上げた。

「あなたね！なんでも思い通りにしようとしてもそうはいきませんよ！ここはあなたの思い通りにはなりません！自分の責任は、自分で果たさなくちゃダメじゃないの！

あなたって、中途半端で無責任な人ねえ〜 私はあなたに無理な事を言っていますか？

私の言うことは全部常識ですよ！」 “なにこれ！ピントはずれのデタラメ！”

数人がこつちを見ていたが、私はびっくり！びっくりしすぎて・・・なんも言えね。やっていないのに「皆さん！この人、痴漢です！」と叫ばれた男のキモチが・・・わかる。

●数日後。私は小さいミスをしてしまった。A子さんから指摘され、それがミスと気づき、

「すみませんでした」と詫びたのだが・・・それで、すみませんでした。

「あなたね！ここへ入ったからには、いいかげんな気持で仕事しないでください！

夕飯のおかずは何にしようか、とか、帰りにスーパーで何を買って帰ろうかな、とか、

そんなことを考えながら仕事しているんじゃないの？仕事には集中してください！

何度言ったらわかるの！こんなこと、私に何度も言わせないでください！それとも、

私の教え方が悪いのかしら？私って、そんなに、教え方が悪いのかしら、ねえ〜」

“ たいしたミスでもないのに、スゴイね！ このひと！”

女には、一つモノを言うと、十くらいになって、返ってくるんだな」ということは・・自分も知らずに・・十くらいで返していたんだよ」

私は初めて「女」と仕事して、初めて「オノレをも知らされた」気がした。

私に直接、仕事を教えてくれる担当はH子さんで、A子さんではなかった。なのに、「私の教え方が悪いのかしら」？「何度言ったらわかるの！」？

彼女は明らかに嘘を言っている。が、その嘘は、周りの人にはわからない。これって「人をおとしいれること」だと思うよ。一緒に入社した（同期の）他の女たちと比べて見れば、なぜ、私ばかりがこんな目にあうのだろう。

それは・・私の「顔の造作」にも・・問題があるような・・気がする。

相手が、優しい女なら問題ないが、負けず嫌いの女が、私の顔を見ると、途端にハッスルしてしまうようだ。それが「私の考えすぎ」とすれば、

強い先輩のA子さんに「A子さくん」「A子さくん」と懐かないからか？ そういうの、私は好きじゃないからしない。が、それじゃ、ダメよね。

上の立場から見れば、自分を尊敬してこないヤツは、いじめたくもなる。

しかし私の性分は・・「こんな卑劣なヤツを、尊敬なんか、できるかあ！」。

そうは思っても、そうもいかない。こっちは一方的に目をつけられている。「力」があるのは、むこうなのだ。じゃ、どうすればいいだろう。

この職場では、中年で単身者は、そのときは、私だけだった。

女に「夫」という「後ろ盾」がないと、やはり、いじめられやすいようだ。ならば、「夫」がいなくても、「強い男」がいるように、見せればいいわ。街の怖いオニイサンの写真を入手して、A子さんに見せながらこう言う。

「これが私の男よ。一緒に住んでいるの。この人、いつもは優しいけれど、キレると怖いのよ。何をするかわからない」なんて、言っちゃったら？ A子さんはもう、怖がつて、いじめなくなる。

男が職場に来ることはない。が、「その存在」が抑止力になる。

こっちが「平和」を望んでいても、むこうは「勝ち負け」しか考えない。

むこうは、こつちと、同じことを考えてはいない。

やはり、こつちの幸せを守るためには、「抑止力」としての強大な軍事力が必要不可欠だ。と、私はこの職場で再認識した。アレ？ 話が飛びすぎた！

●数日後。 数少ない男性の、正社員の主任（三十代）が言いました。

「段ボールから、〇〇を出しておいて！」「どの段ボールですか？」「ごめん！いま課長に呼ばれているから行かなくちゃならない。誰かに聞けばわかるから」

私は積み重なった段ボールの山から「〇〇」と記してあるものを捜したが、見つかりそうもない。近くにいた先輩に聞くと、「あれだと思うけれど、わからないわ。A子さんならわかるから、A子さんに聞いて」と言われてA子さんに聞きに行く。

その時、彼女は忙しくもない様子だったが、なかなか来てくれない。私はアセった。

「お願いですから、来て教えて下さい！」私の必死の頼みに、彼女はやっとこさ、

「しょうがないわねえ」というような乗り気のない顔をしながら、もったいぶったように、重々しく、ユツ、クリと、来てくれて「あれだと思うけど主任に聞いて！」。

「あれ」と言われた箱を運びかかった時、主任が戻ってきてしまった。

「なんだ、まだ出してないのか」「すみません」「それだよ。それでいいんだ」と、傍にいたA子さんが妙なことを言い出した。

「主任！ 皆が「これよ」「これよ」と教えているのに、この人って、なかなか、皆を信用しないんですよ」

ア然とし、ポカーンと、口を開けたままの私に、主任が怒鳴った。